

児童後期から中学生における自尊感情と被受容感との関連 —自尊感情を2因子でとらえて—

The Relationship between Children's Self-Esteem and the Sense of Being Accepted from Close Ones: Self-Esteem as a Two-Factor Construct

卜部 明

URABE Akira

本研究は、児童後期から中学生における自尊感情と被受容感との関連を検討することを目的とした。自尊感情は2因子でとらえ、肯定的感情と否定的感情のそれぞれに対する被受容感の影響を調べた。被受容感は、家族、友人、先生の3者によるものを測定した。対象者は、小学4年生から6年生292名（男子137名、女子155名）、中学1年生から3年生295名（男子145名、女子150名）であった。学校種（小学校・中学校）と性別（男子・女子）により4群に分けて分析を行った。その結果、肯定的感情に対しては被受容感の影響がみられたが、否定的感情に対してはあまり影響がみられなかった。また、誰からの被受容感の影響が大きいかは、対象者によって違いがみられた。これらの結果について考察を行った。

キーワード：自尊感情、被受容感、パス解析、子ども

I 問題と目的

自尊感情の2因子

心理学で自尊感情に最初に言及したのはJames (1890) であるといわれ、その研究の歴史は長く、これまでに数多くの研究がなされてきた。実証的研究において、最もよく使われてきた尺度は、Rosenberg (1965) によるものである。これは10項目から構成されたものであるが、逆転項目の得点を修正した上で、項目得点合計を算出し、自尊感情得点とすることが通常である（注1）。つまり1因子構造ととらえている。

だが、Rosenberg の尺度は、探索的因子分析を行うと、順項目と逆転項目の2因子が抽出される。そこで2因子構造ととらえることも可能である。すなわち、自分自身に対して肯定的な捉え方をどれくらいしているか、そして否定的な捉え方をどれくらいしていないか。その2つによって自尊感情が構成されるという見方ができる。福留ら (2017) は、前者を「肯定的自己像の受容」、後者を「否定的自己像の拒否」と呼んでいる。

福留ら (2017) では、中学生以上70代までの被験者を対象に、Rosenberg 尺度を実施したが、確認的因子分析の結果、1因子よりも2因子の方が適合度が高かった。また、中学生を対象に、ストレス反応チェックリストおよび攻撃性質問紙を併せて実施した結果、

「肯定的自己像の受容」より「否定的自己像の拒否」の方が、「抑うつ・不安」「身体症状」「敵意」との相関、この場合負の相関が高いことを見出している。すなわち、「否定的自己像の拒否」は、心理社会的適応と関連することを示唆するものであった。

福留・森永 (2018) は、自尊感情2因子と自己愛との関連を調べ、肯定的自己像を肯定する傾向が高く、否定的自己像を否定する傾向が低いものは自己愛が高いという傾向を見出している。また否定的自己像を否定する傾向が高いものは自己愛が低い傾向にあった。

Owens (1994) は、高校1年生を対象に、Rosenberg 尺度を修正した自尊感情尺度の全体得点、肯定的項目得点、否定的項目得点のそれぞれと、学業成績、うつ、非行との関連を構造方程式モデルによって調べた。その結果、肯定的項目得点と否定的項目得点は、学業成績、うつ、非行のそれぞれと異なる関連を示している。学業成績に対しては、否定的項目得点が負の、肯定的項目得点が正の影響を与えていた。学業成績は肯定的項目得点に正の影響を与えるが、否定的項目得点には影響がなかった。うつに対しては、否定的項目得点が正の影響を与えていたが、肯定的項目得点の影響はみられなかった。うつは否定的項目得点に正の、肯定的項目得点に負の影響を与えていた。非行に対しては、否定的項目得点が正の、肯定的項目得点が負の影響を与えていた。非

行からの影響はなかった。これらは自尊感情尺度全体得点で見たときには把握できない影響のあらわれ方である。

ト部 (2017) は児童後期から高校生を対象として自尊感情の発達の変化と性差を調べているが、自尊感情を2因子(肯定的感情・否定的感情)でとらえた結果、肯定的感情は小学生から中学生になると低下し、高校生では変化がなかったが、否定的感情は性差がみられ、男子では年齢による違いはなかったが、女子では小学生から中学生にかけて否定的感情が強くなり、高校生でもそのままであった。

自尊感情そのものに関する研究ではないが、桑原(1986)は、自己評価において、肯定的な特徴に対する肯定と、否定的な特徴に対する否定はどちらも自己肯定につながるものではあるが、その両者は、かなり異なったパーソナリティ特徴をもつことが示唆されると指摘する。

溝上(1999)は、肯定的項目からなる肯定性次元と否定的項目からなる否定性次元をわけて、自己評価尺度を作成している。YG性格検査の下位尺度との関連をみると、肯定性次元と否定性次元で、関連のあらわれ方が異なっており、両次元は独立したもののみなされるとしている。

また、坂本(1994)では、抑うつ者は自己の性格特性について否定的な認知に偏っているのに対し、非抑うつ者は肯定的な認知に偏っていた。また、抑うつ者が否定的な自己評価をしているときは、自己の性格特性を肯定的に評価していないというより、否定的に評価しすぎているという結果であった。

これらの研究、指摘をもとに考えると、自尊感情を2因子構造でとらえることで、その理解が深まる可能性が示唆される。

自尊感情の源

自尊感情がどのようなものであるかに関する議論で、コンピテンスと自己価値という2つの要素は、多くの研究者が重視してきたものである(Branden, 2006; 箕浦ら, 2013; Tafarodi & Swann, 1995)。そして、自尊感情にはこの2つの側面があるということは合意ができているといえる(Hart et al., 2006; Pyszczynski & Kesebir, 2013)。

自尊感情を願望に対する成功の割合としたJames(1890)の定義は、コンピテンスに関わるものである。また、象徴的相互作用理論において、幼い子どもたちは、重要な他者が自分をみるように、自分のこと

をとらえるようになると説明されているが(Felson, 1989)、これは自己価値の感覚を説明するものである。他者から受容されることによって自分の価値を感じることになり、それが自尊感情につながるが、それは、発達の早期から始まるものであり、自尊感情の基礎を形成するものとされる(Pelham & Swann, 1989)。重要な他者とはまず養育者である。

Felson & Zielinski(1989)は、5年生から8年生の子どもを対象にした調査で、親のサポート的な行動が自尊感情に影響することを見出している。Demo et al.(1987)は、10歳から17歳を対象とし、「親のサポート(あたたかさ、肯定的な感情)」「統制」「関与(一緒に勉強や娯楽の活動をする事)」「コミュニケーション(親しく話すこと)」などと子どもの自尊感情との関連を調べた。その結果、男子ではサポート以外の3つの変数が、女子ではすべての変数が有意な相関であった。Buri et al.(1992)は、12歳から20歳を対象として、両親それぞれの「養育(nurturance)」が子どもの自尊感情と正の相関を示すことを見出している。「養育」には、親が子どものことを理解し、認めていて、互いに良いコミュニケーションがとれる関係をもっていることなどが含まれている。末盛(2000)は、中学生を対象として、母親の情緒的サポートが高まるほど、子どもの自尊感情が高まることを見出している。

従来の研究では、自尊感情は1因子とみなされ、受容、サポートなどとの関連が調べられていた。上述の通り、自尊感情を2因子でとらえることで、他の変数との関連もより詳しく理解できると考えられる。そこで、本調査では、被受容感と自尊感情の2因子との関連を調べることにした。

また、他者からの受容というときの他者とは、子どもたちにとってまずは養育者が重要であるが、年齢の上昇に伴って、その対象は広がると考えられる。本調査では、子どもにとって身近で重要な存在と考えられる、家族、友人、先生の3者を取り上げることとした。養育者として、母親、父親があげられるが、現代の家族構成は多様化していることを考慮し、今回の調査では家族とした。

本研究の目的

本研究は次の目的をもって行われた。

児童後期から中学生における自尊感情と被受容感の関連を検討する。その際、自尊感情を肯定的感情と否定的感情の2因子でとらえ、それぞれに対する被受容感の影響を測定する。

II 方法

1. 対象：首都圏の公立小学校4年生から6年生292名（男子137名、女子155名）、公立中学校1年生から3年生295名（男子145名、女子150名）を対象とした。
2. 調査時期：令和4年3月。
3. 質問紙：フェイスシートで調査の趣旨説明および協力依頼を述べ、成績とは無関係であること、答えたくない項目には答えなくてよいことを伝えた。無記名とした。
以下について5件法で回答を求めた。
 - 1) 自尊感情8項目。子ども用自尊感情尺度（表1、卜部、2017）を用いた。これは Rosenberg 尺度と同様に全般的自尊感情を尋ねるものである。
 - 2) 被受容感15項目（家族、友人、先生それぞれ5項目）。石原（2013）、鈴木・小川（2008）を参考に作成した。各項目は、「家族といるとき」「友人といるとき」「先生といるとき」の後に、表2の内容が記されたものである。
4. 手続き：調査の実施に先立ち、学校管理職に趣旨を説明し、内容確認を行った。調査の実施は教室で担任が行った。

表1 自尊感情項目

<p><肯定的感情> 自分に自信がある。 人の役に立つようなことができると思う。 自分にはよいところいろいろあると思う。 欠点はあっても自分のことが好きだ。</p>
<p><否定的感情> ちょっとした失敗でも、自分はだめだなと思ってしまう。 自分はたいしたことのない人間のような気がする。 自分のことがいやになることがある。 自分のことを考えると、落ち込んだ気分になることがある。</p>

表2 被受容感項目

大切にされていると感じる。 受け入れられていると感じる。 ほっとした気持ちでいられる。 理解されていると感じる。 認められていると感じる。

III 結果

学校種と性別で4群にわけ、それぞれで、被受容感（家族・先生・友人）を説明変数、自尊感情（肯定的感情・否定的感情）を目的変数としてパス解析を行った（表3～4、図1～4）。

全体としては、肯定的感情に対して被受容感の影響がみられているが、否定的感情にはあまり影響がみられなかった。

肯定的感情について詳しく見ると、家族からの被受容感は、男子では小学生と中学生で差がないが、女子では中学生になると影響が小さくなっている。友人からの被受容感は、女子では小学生と中学生で差がないが、男子では中学生になると影響が小さくなっている。また、先生からの被受容感については男女ともに中学生の方が影響は大きくなっていて、男女で比較すると女子の方が影響は大きいという結果であった。

否定的感情については、全体として被受容感の影響は小さいが、小学生男女と中学生男子で、家族からの被受容感が影響する傾向がみられた。中学女子では友人からの被受容感が影響する傾向がみられた。

表3 パス解析結果：肯定的感情

	家族	友人	先生	R ²
小学男子	.29 ***	.35 ***		.43
小学女子	.39 ***	.30 ***	.15 *	.52
中学男子	.29 **	.21 *	.15 +	.30
中学女子	.17 *	.30 ***	.22 *	.34

*** <.001 ** <.01 * <.05 + <.10

表4 パス解析結果：否定的感情

	家族	友人	先生	R ²
小学男子	.27 *			.10
小学女子	.17 +			.11
中学男子	.19 +			.06
中学女子		.20 +		.10

*** <.001 ** <.01 * <.05 + <.10

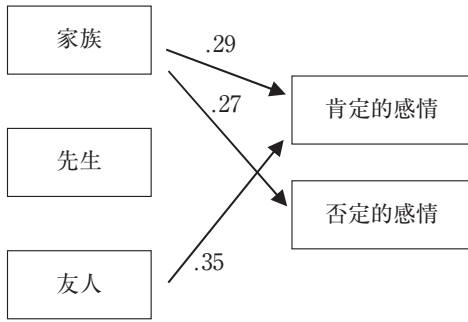


図1 パス解析：小学生男子

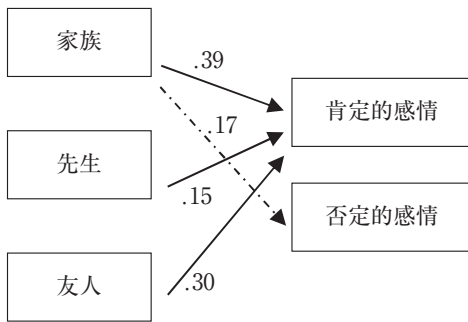


図2 パス解析：小学生女子（注2）

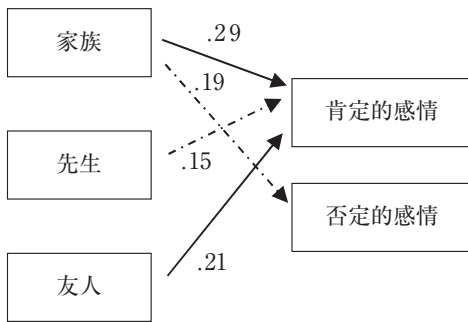


図3 パス解析：中学生男子

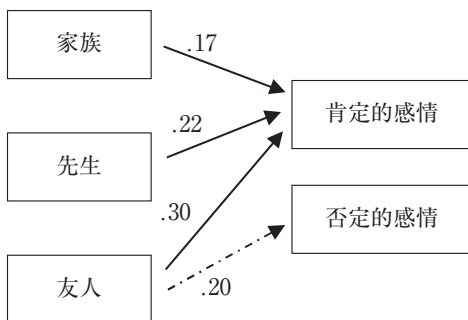


図4 パス解析：中学生女子

IV 考察

本研究では、被受容感が自尊感情に与える影響について検討した。他者からの受容は自尊感情に影響すると考えられてきたが、自尊感情を2因子でとらえ、それぞれに対する影響を調べた結果、肯定的感情にはある程度の影響がみられたが、否定的感情にはあまり影響がみられなかった。

肯定的感情に関しても、年齢の上昇に伴って、被受容感の影響が小さくなることを示唆する結果であった。決定係数 R^2 をみると、男女ともに中学生になると値が小さくなっているが、女子においてより顕著であった。そして、否定的感情には被受容感があまり関わっていないことが示唆された。否定的感情の源になるものは何であるのか。今後の検討課題である。

他者からの受容と自尊感情については、年齢による違いも想定される。被験者の年齢層を広げ、さらに受容以外の要因も含めて、発達の変化についてより詳細な検討が必要である。

今回の結果から、自尊感情を2因子でとらえることにより、その理解が深まることが示唆されたと考えられる。自尊感情はこれまで多数の変数との関連が調べられてきたが、それらは自尊感情を1因子として扱ってきたものである。自尊感情を2因子としてとらえ、改めて他の変数との関わりを検討することの必要性があるのではないだろうか。

global self-esteem (全般的自尊感情) という表現がある。その言葉には、1因子としてとらえた自尊感情がふさわしいのかもしれない。だが、2因子でとらえることによってより多くの知見が得られるのであれば、1因子にこだわる必要はないであろう。これは自尊感情に限らず、自己評価、パーソナリティをどのようにとらえるのが適切であるかという問題と関わるものである。

これまで自尊感情の定義はいろいろなされてきたが、そもそも自尊感情とは何かという問題があり、またその測定方法、尺度の問題でもある。

Rosenberg (1965) は、自尊感情を自己に対する肯定的あるいは否定的態度とした。そして、自尊感情には very good (とてもよい) と good enough (これでよい) という2つの含意があるとしたうえで、後者を重視した。後者では、自分の価値を感じ、自己受容し、自分を尊重する気持ちをもっているが、他者に対する優越感とは区別している。そして、自身の尺度は後者を測定するものとしたが、その点については批判的見解もある (Kerns, 2003; 溝上, 1999)。

谷 (2023) は、確認的因子分析を行い、Rosenberg 尺度は順項目が2因子に分かれ、全体で3因子構造をもつと指摘する。ここで重要なのは、Rosenberg 尺度を3因子でとらえることが妥当であるとしても、それは“自尊感情”を3因子でとらえることの妥当性とは異なるということである。Rosenberg 尺度はこれまで最も使われてきた尺度であるが、自尊感情尺度の最終決定版ではない。

かつて自尊感情は高低という軸でとらえられ、高い自尊感情をもつものは適応的であるとされた。だが、Kernis et al. (1989) が安定・不安定という軸を加え、自尊感情をとらえなおした結果、自尊感情が高くて不安定なものは、怒りや敵意を感じやすく、決して適応的とはいえないことを見出した。

その後も、随伴性自尊感情、潜在的自尊感情など、様々な観点で自尊感情はとらえられるようになった。いまそこに、自尊感情を肯定的次元と否定的次元の2因子で構成されるものとする見方を加えてもよいのではないか。2因子でとらえた研究はまだ少数であるが、その結果をみると、2因子でとらえることによって自尊感情に関する理解がより深まると思われる。福留ら (2017) が指摘するように、否定的因子得点が適応と関わるのであれば、それは大きな関心を集めるテーマとなるはずである。

自尊感情とは何であり、どのようにして測定されるのかという根本的な問いをあらためて考える必要性がある。これまで非常にたくさんの研究が行われてきたが、まだ明らかになっていないことが少なくない。

謝辞

調査にご協力いただきました教職員および児童生徒の皆さんに感謝を申し上げます。

*注1：「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」という項目は、因子負荷量が小さいという理由で削除されることが多い。

*注2：破線は有意な傾向を示す。以下同様。

*なお、本調査のデータは、卜部 (2023) と同一である。

文献

Branden, N. (2006) What needs to be done? In M. H. Kernis (Ed.) *Self-esteem issues and answers* (pp. 439-441). New York: Psychology Press.

Buri, J. R., Murphy, P., Richtsmeier, L. M., & Komar, K.

K. (1992) Stability of parental nurturance as a salient predictor of self-esteem. *Psychological Reports*, 71(2), 535-543.

Demo, D. H., Small, S. A., & Savin-Williams, R. C. (1987) Family relations and the self-esteem of adolescents and their parents. *Journal of Marriage and the Family*, 49(4), 705-715.

Felson, R. B. (1989) Parents and the reflected appraisal process: A longitudinal analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56(6), 965-971.

Felson, R. B., & Zielinski, M. A. (1989) Children's self-esteem and parental support. *Journal of Marriage and the Family*, 51(3), 727-735.

福留 広大・藤田 尚文・戸谷 彰宏・小林 渚・古川 善也・森永 康子 (2017) 中学生におけるローゼンバーク自尊感情尺度の2側面、*教育心理学研究*, 65, 183-196.

福留 広大・森永 康子 (2018) 自尊感情の2因子と2種類の自己愛の関連性、*広島大学心理学研究*, 18, 107-126.

Hart, D., Atkins, R., & Tursi, N. (2006) Origins and developmental influences on self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.) *Self-esteem issues and answers* (pp. 157-162). New York: Psychology Press.

石原由美 (2013) 思春期・青年期における周囲の他者からの被受容感と自己の「本来感」との関連、*九州大学大学院人間環境学研究院紀要*, 14, 117-124.

James, W. (1890) *Principles of psychology*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ジェームズ・W. 今田寛 (訳) (1992) *心理学〈上〉* 岩波文庫)

Kernis, M. H. (2003) Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14(1), 1-26.

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989) Stability of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56(6), 1013-1022.

桑原知子 (1986) 人格の二面性測定の試み、*教育心理学研究*, 34(1), 31-38.

箕浦有希久・成田健一 (2013) 2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討、*感情心理学研究*, 21(1), 37-45.

溝上慎一 (1999) *自己の基礎理論 実証的心理学のパラダイム*, 金子書房.

Owens, T. J. (1994) Two dimensions of self-esteem: Reciprocal effects of positive self-worth and self-deprecation on adolescent problems. *American Sociological Review*, 59(3), 391-407.

- Pelham, B. W., & Swann, W. B. (1989) From self-conceptions to self-worth: On the sources and structure of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57(4), 672-680.
- Pyszczynski, T., & Kesebir, P. (2013) An existential perspective on the need for self-esteem. In V. Zeigler-Hill (Ed.) *Self-esteem* (pp. 124-144). New York: Psychology Press.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 坂本真士 (1994) 抑鬱者の性格特性の自己評価におけるネガティビティ・バイアス、*心理学研究*, 65(2), 156-161.
- 末盛慶 (2000) 母親の養育行動と思春期の子どもの自尊心—文脈効果の検証—、*家庭教育研究所紀要*, 22, 18-31.
- 鈴木真吾・小川俊樹 (2008) 中学生における自尊心と被受容感からみたストレス反応・本来感の検討、*筑波大学心理学研究*, 36, 97-104.
- Tafarodi, R. W., & Swann, W. B. Jr. (1995) Self-liking and self-competence as dimensions of global self-esteem: Initial validation of a measure. *Journal of Personality Assessment*, 65(2), 322-342.
- 谷冬彦 (2023) 自尊感情の構造に関する研究—Self-Esteem Scaleにおける3因子構造の検証—、*神戸大学発達・臨床心理学研究*, 22, 26-31.
- ト部明 (2017) 児童後期から思春期における自尊感情の発達変化と性差、*学校メンタルヘルス*, 20(1), 79-84.
- ト部明 (2023) 児童後期から中学生における本来感の発達の变化、性差および被受容感との関連、*国立音楽大学研究紀要*, 57, 1-6.